

自制心が試されている

ある高校で担任をしていた時の学級通信の一部を紹介したい。こんなことを書いていた。

◆1987年、エイズパニックが起きた。日本で初の女性エイズ患者が明らかになったのだ。その患者が売春しているかのように語られ、近隣の男性たちは検査に殺到した。その女性の顔写真を雑誌が掲載するという甚だしい人権侵害もあった。感染者の女性が出産するや、「当方に感染者はいません。」という張り紙が近くの産婦人科病院に張り出された。マスコミにも「救えぬか罪なき胎児」など、まるで感染者を犯罪者扱いする報道があった。◆エイズの感染経路は血液の接触、性行為、妊娠時の母子感染の三つしかなく、日常生活ではめったに感染しないことも理解されてきている。しかし、実態はどうなのか。エイズという病気と必死に闘っている人、そしてその家族を不当に傷つける権利は誰にもない。◆エイズ患者の取材を続けたある新聞記者は、こんな記事を書いている。「エイズ感染者と、この春結婚する女性もいる。彼女は私と同年齢。『出会って間もないころ、彼がぽろっと、自分は感染者と言ったの。それを聞いて、早く好き、と打ち明けよう、と思いました。だって時間ももったいないから。』彼女の瞳は、吸い込まれるように大きかった。生きることの意味。愛することの意味。目をそらさずに、病をしっかりと見つめると、それらが見えてくるような気が、私はする。」◆君たちにも「差別という病」に侵されないようエイズ問題に目を向けてほしいと思う。

この学級通信を書いてから30年以上が経過した。そして今、コロナ禍の中で様々なことが起きている。自粛要請に従って時短営業をする店に「自粛してください。次発見すれば、警察を呼びます。」などと貼り紙をしたり、県外ナンバーの車が傷をつけられたり、あおり運転をされたりする被害が相次ぎ、自衛のために「県内在住者です」と書かれたステッカーが売られる事態となっているなどと、新聞が報じている。ネットでは周囲に自粛を強いる人を指す「自粛警察」という言葉が話題になっている。

これらの行為をどう理解したらよいのか。正義感によるものなのか、嫌がらせなのか。休業要請に応じない店名が公表されたが、この行政の対応が、一部の人たちに「要請に応じない店には何をしてもかまわない」と思わせたのかもしれないなどと考えてしまった。

皆さんの中には、このような大人の振る舞いに幻滅している人もいるかもしれない。しかし、何があろうと、どんな時でも節度ある言動を崩さない人も世の中にはいる。今、我々の「自制心」が試されている。

頑張れ徳風生！



校長 東則尚